

は創造に先立つ神の内なる普遍を否定する。だが、神は将来創造しようとしている諸個物を、まだそれらが生成していない時点において明証的に認識しているとも主張している (*Ordinatio*, I, d.35, q.5)。そうであるならばそうした個物の認識のために、神は神的事を携えている必要がある (オッカムは人間において成り立つ認識と、天使や神のそれとを平行的に考えている)。また、ことばによって創られたからこそ、世界の諸個物は整然と分類できるようなものとして存在しているのではないか。つまり、世界の背後に言語的な構造を考える必要があるのではないだろうか。

以上、最初の2章の紹介とコメントで紙数が尽きてしまった。後半2章を含め、総じて著者の意欲的な議論の故に、本書はこの分野の研究者にとって多くの刺激を与えるものとなっている。本書の主張の一つ一つを吟味し、さらにその上に研究を積み上げる可能性がある。なお、著者はその後、『オッカム『大論理学』註解』(創文社)として詳細な注釈つきの翻訳を進めつつあり、現在第3巻(第II部:命題論)まで刊行が進んでいる。これを含めて、著者の努力に敬意を表したい。

---

## 「中世思想原典集成」(全20巻)

### 刊行完成に際して

——現代日本におけるその意義と挑戦——

宮本久雄

今回上智大学中世思想研究所(所長K.リーゼンフーバー教授)が中心となり、翻訳者168名を結集してここに「中世思想原典集成」(以下「集成」と記す)の訳業が成就したことは、本邦の中世哲学研究史上の記念碑的意義をもつと共に、他の宗教・哲学・文学・芸術・歴史などの諸分野にまで大きなインパクトを与えるものと信ずる。中世哲学の翻訳事業は他にトマスの「神学大全」(創文社)、「アウグスティヌス著作集」(教文館)、「キリスト教教父著作集」(教文館)、「ドイツ神秘主義叢書」(創文社)など多々推進されており旭日昇天の勢いにあるという印象を与え、各々連関して一つ

の時代的意義をおびているが、今はその文脈で「集成」に絞って5点にわたり評者の思うところをいささか開陳したい。

1 「集成」本体について。「集成」は2世紀ギリシア教父から近世スコラ学に至る1500年間の思索と生の歴史的総覧という体裁になっている。哲学史的には、教父時代(1~5巻)、次に修道院神学に結実する中世前期(6~10巻)、次に盛期スコラ学形成に寄与したイスラーム哲学からトマスまで(11~14巻)、そして神秘主義の精華を示して(15~17巻)、最後に近世の夜明けに至る後期から近世のスコラ学の時代(18~20巻)が歴史年代順に総覧されている。

内容的観点からすれば「集成」はギリシア・ローマ哲学と文化、アラビアの思索、ヘブライ・キリスト教、ゲルマンの生さらに南米圏などの多彩で重層的な異文化的出会いとその止揚であり、言いかえると人間の根源的経験の源泉を示しているといえる。その豊かな経験の源泉にフィロンからマイモニデスやカバラーを含むユダヤ思想への参照も欲しかったけれども。

2 戦後の中世思想研究にとっての意義。これまで中世哲学の先達のお蔭でアウグスティヌスやトマスなどを中心に基礎的研究はほぼ盤石のものとなったといってもよいのではなからうか。その基礎的研究の間にも、時代の哲学的潮流の挑戦(ドイツ観念論や言語哲学やポストモダニズムなど)に応えようとしてきた努力も見逃せない。このような先達の研究に加え「集成」は中世の他の諸領域(歴史、美術、文学、言語など)の広い地平を開放し、所謂中世学全体の協働へと第一歩を披いたともいえる。例えば、奇跡物語や聖人伝、訓戒などは中世民衆史の資料として中世史家の貴重な資料となるのである。さらに「集成」は中世哲学会でもテーマとなった言語論も含めた聖書解釈とそれに基づく人間の超越や神学的思索への参照点となっている。そして特に以上の思索と生の場として修道的共同体であれ大学であれ共同体の地平を開示している点で今日の大学や学会の解体化の流動にあってますます生き方をも含めた学の共同体的協働の重要性を自覚する契機となりうる。

3 現代の思想状況における意義。欧米ではこれまで哲学を主導した所謂大哲学者や学派(ドイツ観念論や言語分析など)が解体し群小思想家が多彩な方法と思索を展開するに応じて今やカント、ヘーゲル支配の時代も本邦では終りを告げ思想の流動的状況にあるといえる。それは逆に現象学や言語哲学などに基づきながら新しいエチカや宗教哲学の構築を可能にする時代への突入のしるしともいえよう。それだけ時代の

危機は講壇哲学の無力を際立たせているわけである。その文脈において「集成」は、ペルソナ、歴史、超越、共同体などの多様な源泉となって新しい哲学の構想に資するのではあるまいか。例えば「女性の神秘家」はフェミニズムに新視点を、また「近世のスコラ学」中の人権理論は文明の協和の構想に資する源泉となりえよう。これは後にふれるが、ユダヤ・ヘブライズムの集成的源泉は、その多様・多元性を通して偏狭な一神教を解体して地球化時代の宗教哲学構想にインパクトを与えないであろうか。他方で、「集成」と東洋哲学、殊に本邦では西田哲学および京都学派との対話は重要な課題となるであろう。というのも、西田はアウグスティヌスの名などをその著作で挙げてはいるにしても、やはり教父神学、中世哲学やその霊性とは十分対話して思索したわけではないのであり、その「場の理論」が容易にその門下生によって大戦中「大東亜共栄圏」の思想に引きずられうる余地を残したといえる。その点で超越やペルソナ論あるいは歴史や修道の共同体などの西欧キリスト教視点とのさらなる対話のがぞまれる。他方で独我論も含め個人主義化や逆に政治哲学にみられるように組織論化する西欧思想にとって「場の理論」は自己吟味の大いなる媒介となるであろう。以上は余りに簡単な指摘であるが、本邦の哲学者が特に近代以降の講壇哲学者が「集成」のような領域の研究にふれていない以上、中世哲学者の側からの積極的な西田や現代の思想との対話のがぞまれるところである。

4 グローバル化時代における「集成」が象徴する中世哲学の意義。最近のマス・メディアや日本人の体験を通しての情報によってイスラムの東南アジアに至るまでの衝撃的な諸活動、他方で辺地パレスチナのイスラエルとそれに関わるユダヤ教の現在が我国にまで大きな関心を引きおこしている。いずれも報道のされ方によっては、一神教が我々日本人にとって理解しがたい発想や排他的傾向をおびていると映る。西欧は16～17世紀にかけて、キリスト教内部で宗教戦争や様々な対立を経験した。その結果、宗教的さらには政治的な寛容 (tolerantia) を学んだとされ、自らの宗教的信条や政治的主張の絶対視を避け和解の術を用い様々な分野で協調できるような世界を築いたと一応考えられている。勿論その協調は、ある自律的な思索と意志決定に裏づけられており、我国におけるような非自律的でなあなあな妥協的性格のものではあるまい。キリスト教的ヒューマニズムとはそうした寛容を含んでいる。しかしそのキリスト教的なヒューマニズムに根差すと思われる欧米圏にあって、現在文明の対立 (S. ハンチントンなど) が声高に説かれるのはなぜか。

それにはやはりキリスト教文明が有名無実のものとなり、経済優先主義に陥って自同的自己中心的な動脈硬化症に陥っているという要因も認められることであろう。21世紀が様々なレベルで対決や紛争の和解を求める世紀となるなら、三大一神教の和解が何よりも先にモデルとして要請されるであろう。その際「集成」が示すギリシア教父における異文化の受容、近世スコラにおける国際法的視点さらにP. アベラルドゥスやN. クザーヌスの宗教的和解への努力などが参照されまいか。

5 今後の中世哲学の将来的課題。1でもふれたように、「集成」の完成によって中世哲学が人類史上1500年にわたる巨大な知恵と生の道行きの源泉であることが示された。この点は、先述したような中世思想の翻訳の事業によっても様々な視点から際立たされているわけである。従ってかつて中世思想がキリスト教の御用哲学とみなされ、例えばバートランド・ラッセルの西洋哲学史におけるように中世思想が西欧哲学史から抜けていることは最早想像もできなくなったといつてよい。哲学史研究において「中世哲学」が復権あるいは初めて脚光を浴びる機会が到来しているといつてよいであろう。この点をふまえ次に中世哲学が哲学史研究のレベルから哲学に昇格するという課題が依然つきつけられているようにみえる。これはフランス思想界において顕著なことであるが、中世哲学は大学では哲学史研究として学ばれている。その点ではジルソンやA. ド・リベラの研究業績も哲学史家の研究として大学では受容されているようである。ところで3でふれたように、宗教思想や文学を背景としながら本格的な哲学が構築されている状況も見過しにできまい。E. レヴィナス、P. リクール、J.-L. マリオンなどの名がすぐ思い浮かぶように、勿論彼らは宗教的信仰とその背景から哲学を厳密に区別しようとしているわけであるが、いずれにせよ、「集成」が示すような多彩な知恵の源泉と問いは、中世思想を哲学史研究を超えて哲学として立ち上がるように促して止まないといえよう。例えば「他者論」一つをとり上げても、現象学的他我論から議論を出発させる限りは、真実に他者が問題にはならないのではないかと思われる。それにはもっと根源的な「集成」的な他者の原トポスに立返って考究し始める必要があるまいか。

さらにこの知恵の源泉という立場に立つとき、従来の哲学と神学との二元論的区別とそれに基づく思索がどれ程今日意味があるかとも問われてくる。啓示神学と自己限定することが、他方で豊かな人類史的経験に自己を閉ざしてきたのはついこの間までのことであった。他方で、神学的伝統とその問いかけを排除して基礎付け主義的に厳

密な学としての哲学を構築しようとする自己限定の仕方も今日解体し、新しい自己開放の方法が求められている現状でもある。かつて「神は死んだ」と語られ、今や「人間は死んだ」が公然たる標語になっている今日、様々な価値観や人間理解、異文化が交錯衝突し思想が多分化してさらに自壊し未来が見えない今日こそ「集成」的知恵と生のエネルギーが甦って「知恵」を語ることが求められているカイロスなのである。

以上ここ十年来の中世思想に関わる多彩な翻訳事業の象徴として「集成」をとりあげ、「集成」に仮託して評者の哲学的夢想を語らせていただいた。最後に付加するならば、翻訳が他者・異文化との対話であり、翻訳者の解釈をも含む新しい作品創造という側面をもつならば、翻訳はいつか新しい哲学の作品化につながり、その意味で翻訳作業はここに結集された各翻訳者とまた翻訳共同体の中で小さな炎であっても静かな情熱と共に持続してゆくと信ずる。